

第1章 平成20年度の研究について

西多 由貴江

1. 研究テーマ

学びをつなぐカリキュラムの編成にむけて

～幼児の思考する姿をみつめて～

2. テーマ設定の理由

平成18年12月に教育基本法が改正され、平成19年6月には学校教育法が改正された。それを受けて平成20年4月には、幼稚園新指導要領が告示され21年度から全面実施となっている。改訂の中で、生涯にわたって学び続けることの必要性や、幼児教育の重要性が謳われている。また、幼稚園の具体的内容として「学びの連続性」や「小学校との連携や交流を図る」ことが明記されている。

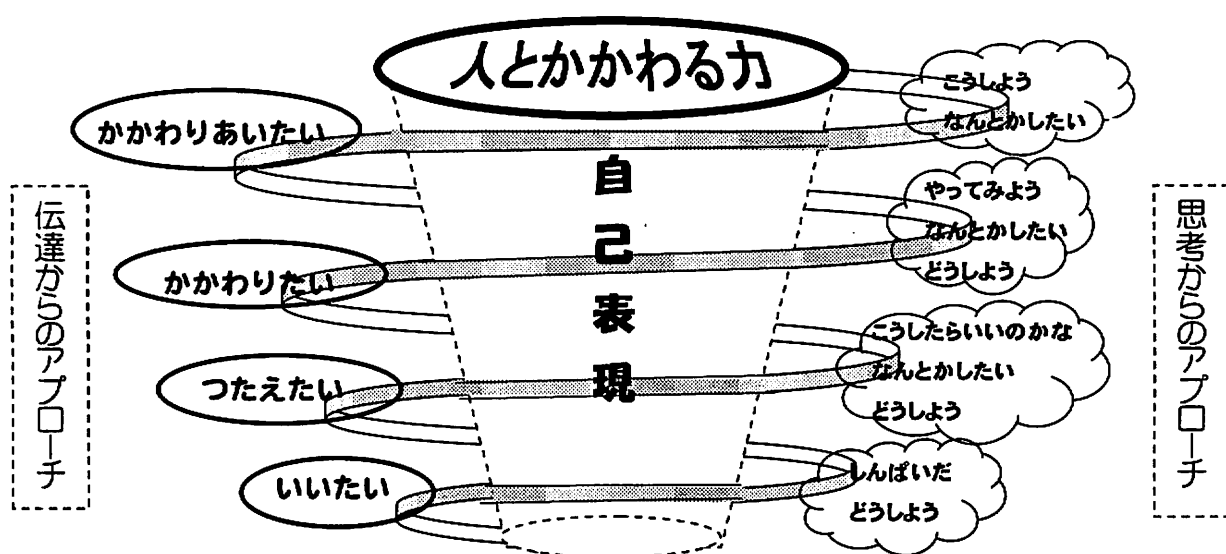
このような教育改革の中、私達は、平成16年度より3年間、研究テーマ「幼児期の学びを探る」を掲げ、幼児らが遊びの中で何を学んでいるのかを探ってきた。16年度は、学びにおける直接体験の大切さを再確認してきた。17年度には、学んだことを「身体的側面」「知的側面」「心的側面」「社会的側面」の4つの側面に分類し、学年による学びの特徴をつかんできた。そして平成18年度は、4つの側面の一つ「社会的側面」に焦点を当て、①安心できる人間関係の中で学ぶ体験、②思い通りにならないことを通して学ぶ体験、③集団活動の中で友達を通して学ぶ体験、の3点が人とかかわっていく上で大切であることを確認した。

3年間の「学び」の研究で、幼児らは遊びを通して様々なことを学んでいることが明らかになった。しかし、学びの連続性については、まだ系統だっていない。幼児期の学びが小学校にどうつながっていくのかを明らかにしたいと考えた。そこで、「学びをつなぐカリキュラムの編成にむけて」をテーマに掲げ、今年度は2年次の研究である。

3. サブテーマ設定の理由

昨年度はサブテーマ「一人一人の自己表現をみつめて」を掲げ、一人一人の自己表現のあり方を見つめてきた。一年を振り返り、一人一人の自己表現のあり方の特徴から、人とかかわる力を育む自己表現を「伝達からのアプローチ」「思考からのアプローチ」の二つのアプローチに分類するに至った。

〈一人一人の自己表現のあり方〉（紀要第54集 p91、92）



実際2つのアプローチは常に表裏一体であり、どちらも幼児期には大切である。教師は、つつい言葉で表れる伝達側の自己表現に目が向きがちだが、人とかかわる力を育む為には、見えない思考からのアプローチにおける表現のあり方にも心をくだかなければならないことを確認した。

そんな中で、次のような気になる幼児の姿も見えてきた。

- ・ 自分なりに考えてはいるが、それを表現する手立てがわからない幼児
- ・ 友達の考えに同調することで安心し、自分の考えをもととしない幼児
- ・ 新しいものや環境に出会った時、どのように考え、向き合っていけばいいのかわからない幼児
- ・ 考えすぎて躊躇してしまう幼児

そこで、今年度は上記の幼児らの姿を踏まえて、一人一人の幼児が遊びの中で試行錯誤したり、戸惑ったり、工夫したり、操作したりする姿などを丁寧に探ることにした。そのことによって、幼児らが様々な状況の下で「ひと・こと・もの」とのかかわりで生じる個々の課題をどのように思考し、解決しようとしているのか明らかとなると考えたからである。

以上、サブテーマ「幼児の思考する姿をみつめて」の設定理由である。

4. 研究の目的

- ・遊びの中で幼児の思考する姿を探る。
- ・遊びの中で幼児の思考を促している教師の援助や環境の構成を明らかにする。

5. 研究の方法

- (1) 事例を収集する。
- (2) 事例を考察する。
幼児の思考する姿を読み取り、考察する。
どのような教師の援助や環境の構成が幼児の思考を促しているか探る。
- (3) 各クラス毎に1年を振り返り、それぞれの「幼児の思考する姿」や「教師の援助と環境の構成」についてまとめる。
- (4) すべての事例の「幼児の思考する姿」「幼児の思考を支える教師の援助と環境の構成」を一覧表にまとめる。